令和２年度きのくにコミュニティスクール推進座談会（みなべ会場）

１．日　時　令和２年１０月２日（金）　13 時 00 分～17 時 00 分
２．場　所　国民宿舎紀州路みなべ
３．参加者　県 CS マイスター、市町教育委員会担当者、県立学校教員、市町立学校教員、学校運営協議会委員、共育コーディネーター　等　合計 55 名

４．ねらいと成果・課題

○和歌山県ＣＳマイスターを交えて協議することで、参加者がそれぞれの立場からコミュニティ・スクールについての展望を持つ。

（１）行政・学校の実践発表から

３つの異なる立場からの実践発表（①教育委員会が主導して、学校と地域の協働を進めていく実践、②学校運営協議会設置に向けて、既存の活動から移行してきた学校の実践、③地域の小中学校と連携しながら取組を進めてきた高校の実践）により、様々な立場や課題意識に基づいた取組事例を知ることができた。

またＣＳマイスターからは、各学校・地域の状況に合わせた取組について、助言を受けることができた。

（２）県内各地の情報交換

参加者が同じ課題意識を持って座談会を行うことで､自身の取組を振り返るとともに、情報収集の機会となり、今後の推進に向けたヒントを得ることができた。

5．研修内容

◆実践発表（１）
「行政間の連携から一歩前へ」

＜発表者＞	紀の川市教育委員会　教育審議監	山田　浩史	氏
	紀の川市教育委員会　社会教育主事	南　忠宏	氏
＜助言者＞	和歌山県ＣＳマイスター	森　博司	氏

○紀の川市の実施状況と課題意識

平成 29 年度から学校運営協議会の設置を開始、令和元年度には市内全小中学校に設置している。たくさんの地域の方の参画により活動は進んでいるが、従来の共育コミュニティの取組と学校運営協議会を連携させていくという点で課題意識を持っている。

そこで、「鉄は熱いうちに打て」「逢うた時に笠を脱げ」をキーワードに、市教育委員会教育総務課と生涯学習課が中心になり、各学校の学校運営協議会を訪問したり、共育コーディネーターが学校運営協議会の協議に参画したりする機会をつくっている。

○これからの紀の川市の取組

取組のプロセスをより具体的に示せるように、紀の川市版ヒント集の作成に向けて動き出している。協力校を募集したところ、８校の協力が得られた。学校運営協議会の相互参観や、内容についての協議を行うことで、チェックを重ねながら活動の総合化・ネットワーク化を進めていきたい。

また、共育コミュニティコーディネーター会議と学校運営協議会との連携を進めることで、コーディネーターの育成や学校と地域をつなぐ役割の強化を図っている。

さらに県教育委員会と連携し、近隣市町間の連携や学校への周知も進める。

○助言者より

共育コミュニティという基盤があってこそ、紀の川市のコミュニティ・スクールがあることから、従来の取組を継続・発展できていることがわかる。学校教育の関係者と、社会教育の関係者が、それぞれの立場にこだわるのではなく、互いの違いを認めながら前進しようとしている。お互いの活動を見学することをとおして、関係者の認識が変わり、お互いの強みをどう活かすのかを考えることができる。串本町でも「あわてず、急がず、できるところから」を合言葉に、ゆっくりと取組を進めた。地域の中でも違いを感じる部分はあると思うが、その違いを認めながら取組を推進してほしい。

◆実践発表（２）

「みなべ町立南部小学校のコミュニティ・スクールの取組」

＜発表者＞	みなべ町立南部小学校	校長	湯川　三生　氏
	南部小学校学校運営協議会	会長	松本　哲　氏
＜助言者＞	和歌山県ＣＳマイスター		下田　喜久恵　氏

○南部小学校の実施状況と課題意識

令和２年度に学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとして活動を始めている。町の人口が減少していく中、児童を取り巻く家庭環境も変わってきている。生活の中で多様な人と接する経験が少ないからか、コミュニケーション面で児童の課題を感じることが増えてきている。

学校運営協議会の立ち上げ以前には、ＰＴＡが中心となって小遠足や球技大会、地引網体験、家庭科の授業補助、戦争体験出前授業など、さまざまな活動を行っていた。これらの活動を学校運営協議会が中心となってコーディネートしていけるようにしたいと考えている。

○これからの南部小学校の取組

地域の高齢者を中心に、住民が校内に入ってもらえる機会を増やしていきたい。児童にとって、多くの大人からほめてもらうことができる、というメリットを最大限に活かし、児童の自己肯定感の高まりをめざす。

また、幼・小・中・高が近くに集まっているという地理的な特徴を活かし、長期的なつながりを意識した教育ができるように、継続的な取組にしていく。

○助言者より

学校に地元の方が入ってきてくれる、ということは、私自身の校長時代に実現できなかった理想の姿である。そのための「人のつながりづくり」に特効薬はない。地道に細かく活動を続けていくしかない。

有田市の学校運営協議会では、「ＣＳだより」を委員の方に作ってもらい、地元の方や保護者が集まる行事などの機会に校長が紹介している。地道な活動を続けて３年目にようやく、悩みを出せる会になってきた。立ち上げから数年たった南部小学校が、このような姿になっていることを楽しみにしている。

◆実践発表（３）

「県立新翔高等学校のコミュニティ・スクールの取組」

＜発表者＞　和歌山県立新翔高等学校　教諭　横嶋　希和　氏

＜助言者＞　和歌山県ＣＳマイスター　大浦　俊一　氏

○新翔高等学校の実施状況と課題意識

平成１９年度からスタートした「総合学科」を活かし、地域とつながる特色ある学びを進めている。学校運営協議会には、卒業生や元スクールソーシャルワーカー等、学校とつながりの深い方が委員として入り、熱い思いを持って活動している。学校運営協議会では、新翔高校の魅力を高める方法について、様々な観点から議論している。魅力を高める取組として、近隣の中学生へのアピールが大切だと考え、学校紹介の動画を作成したり、中学生から見てキャッチーな表現を学校紹介の資料に取り入れたりした。また、近隣の中学校との連携に力を入れたことにより、結果として「地域で子供たちを見守る意識」も高まっている。生徒数が減少している中、今後の新翔高校の在り方を考えていく必要性を感じている。

○これからの新翔高等学校の取組

地域との交流をどう進めるのかを検討することや、校内外との情報共有・情報発信を進めていくために、よりよい方法を模索していきたい。また、熟議の内容を充実したものにするため、意見を出しやすい雰囲気のある学校運営協議会の実現に向けて、取組を続けていく。高校だけでなく、中学校の教職員とも情報交換を行ったことで得られた成果を活かしていきたい。

○助言者より

これまで教育現場、教育行政、定時制・通信制高校、公民館と様々な現場を経験してきた。その中で、子供が大人と交流することにより学びを深める姿を目にし、地域とともに取組を継続することの効果を感じている。新翔高校の取組においても、地元を知り、発信する学習や、幼稚園から高校までをつなぐことなど、チャンスはたくさんある。「まだまだ課題が多い」という悩みについては、「弱点の分析ができている」と捉え、ここから改善していく機会につなげてほしい。やってみてうまくいかなければやめることもできる。うまくいかなかったことも財産になり、それを繰り返すことで「学校は変えられる」と、自身の経験から言える。

◆座談会

「市町村・学校の課題に応じたグループ協議」

＜講評＞　和歌山県ＣＳマイスター　大谷　裕美子　氏

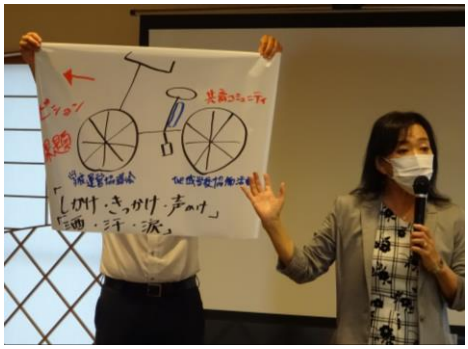
○グループ協議

参加者の立場や課題意識によって分けられたグループで協議を行った。各グループには１名ずつファシリテーターを置き、進行とホワイトボードへの記録を行った。

○講評

コミュニティ・スクールや地域学校協働活動の極意は「しかけ・きっかけ・声かけ」。できる人が、できるときに、できることをすればいい。そのような環境を作っていくことが大切である。

「きのくにコミュニティスクール」は、電動自転車に例えられる。ペダルからの力を推進力に変える後輪（地域学校協働活動）があり、前輪となる学校運営協議会が方向性を決めていく。そして、校長先生がハンドル・ブレーキを担い、スピードの調整を行っていくものである。電動のバッテリー部分には、教育委員会が入り、財政面での支援や制度設計等で推進をサポートしていく。今後の発展に期待している。



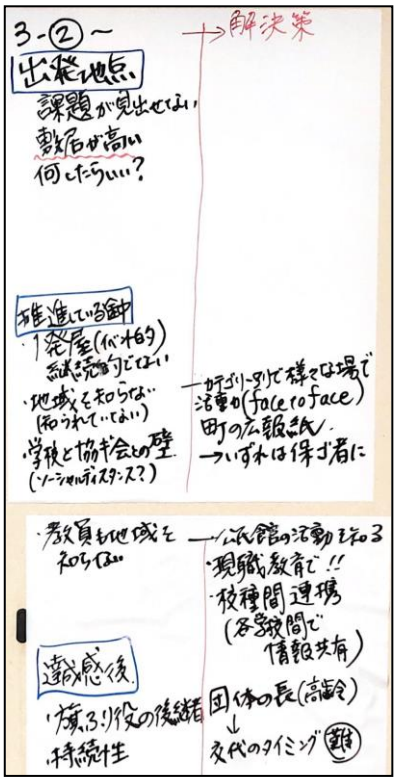
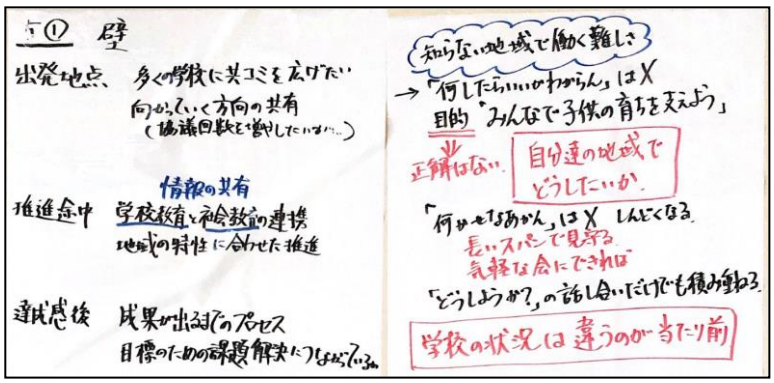
6．参加者の声（アンケートより）

（１）教職員

・「子供にこんな力をつけてほしい」などの地域の願いを聞いてみたい。
・座談会形式は話がしやすく、司会・記録を行政の方がしてくださったので、話したいことを言えて、来てよかった。
・地域が広いので、どうしても関係の深い地域と浅い地域が生じてしまうことに課題を感じている。
・コーディネーターの不在が課題となっている。

（２）学校運営協議会委員

・座談会の時間が短くなり、協議が深まらなかった。

（３）教育委員会職員

・管内の各学校運営協議会での取組に違いがあることに気付けた。紀の川市の事例を参考に進めていきたい。
・ＣＳマイスターに来ていただく機会を作りたい。
・座談会では、席を変わらずに同じグループでゆっくり意見交換したかった。